世界文化遺産 仁和寺前ホテル計画の見直しを求めるアピール
呼びかけ人コメント

2021年3月25日　13：00　　市政記者室にて記者会見

中島　晃（弁護士・事務局）より紹介

同席された呼びかけ人の紹介（宮本憲一さん、広原盛明さん、映画監督の土橋亨さん）。地元から桐田（事務局）。

◆趣旨説明

「世界文化遺産　仁和寺前ホテル計画の見直しを求めるアピール」　発表にあたって

中島　晃（弁護士・事務局）

現在、京都市右京区にある世界文化遺産仁和寺の門前に、建築基準を大きく上回る特例を前提としたホテル建設が計画され、さき頃住民に配布された資料によれば、この夏頃着工の予定とされています。

こうした状況のもとで、世界文化遺産である仁和寺とその周辺の景観・環境を守る立場から、下記のよびかけ人の連名で、「世界文化遺産　仁和寺前ホテル計画の見直しを求めるアピール」を発表し、京都から全国へ、そして世界へ向けて、この問題を広く訴えていくことにいたしました。

古都1200年の歴史にはぐくまれてきた、人々の暮らしのなかにいまも生き続けている美しい景観を守るために、京都市も事業者も一度立ち止まって、この計画の根本的見直しを行うことを心から望んでこのアピールを発表いたします。（別紙アピール）

よびかけをしていただいたのは、8人の方々です。

◎アピール呼びかけ人

池内　了　（総合研究大学院大学名誉教授、名古屋大学名誉教授）
大石　芳野　（写真家）
加藤　登紀子　（歌手）
柴田　京子　（山とみ女将）
土橋　亨　（映画監督）
野田　正彰　（精神科医、ノンフィクション作家）
広原　盛明　（元京都府立大学長）
宮本　憲一　（元滋賀大学学長、大阪市立大学名誉教授）
（以上8人、敬称略）

◆コメント

ホテルを無造作につくり、悠久の景観を破壊

宮本憲一さん（元滋賀大学学長、大阪市立大学名誉教授/環境経済学・公害論）

専門は環境経済学、公害論です。

私は、二つの点で仁和寺門前にホテル建設をすることに反対であります。

一つは2019年、京都は観光公害と言ってよい、観光客による市民生活妨害によって、観光容量、あるいは環境容量オーバーになり、規制が必要になっているんですね。これ以上のホテル建設は過剰で、プラスよりもマイナスが大きいので、中止すべきである、これが第一です。

第二は、仁和寺周辺地域の歴史的遺産は、景観の美しさでもあるわけですね。

もちろん、仁和寺の歴史的な建造物、あるいはなかの宝物は当然でありますけれども、私は、やはり景観の美しさ、これを破壊する門前のホテル建設には反対であります。

実は、観光公害という言葉は私が作ったんです。

1970代に遡るんですけれども、軽井沢で事件が起こりましたね。

軽井沢の別荘の建設ラッシュで、森林や景観が破壊される、あるいは観光客の混雑から生じた廃棄物の処理困難や景観破壊を観光公害というふうに見られたわけです。私はそれを観光公害と名付けて、その制限のための環境容量をアセスメントすべきだと提案したことに始まるわけです。これは論文を書きまして、それ以後、環境省でさえ観光公害という言葉を使うようになるんですが、こういうことは、まもなく京都にも波及しました。

私が強調しておきたいのは、京都は観光公害を制御するために非常に先駆的なことをやってのけたということもあるんですよね。

ちょうど80年代の初めから半ばにかけて、嵯峨野の周辺で、観光客によって廃棄物が無造作に捨てられてむちゃくちゃになるということがありました。常寂光寺にいる友人、長尾住職（亡くなられましたけれども）が、嵯峨野で空き缶や空き瓶の廃棄物が散乱して環境を破壊する行為を防御するために、ゴミゲリラという組織を作りました。ゴミを捨てるきれいなカゴを沢山嵯峨野の周辺に置いて、そこに捨てさせた。京都市は当時、分別はまだやってくれないものですから、長尾さんは、その廃棄物を自分の寺へ持っていって、境内で分別しまして、再生したり、処理をするということをやっていたわけですね。

これは、京都市にとっては非常に大きな衝撃になったわけで、当時僕のクラスメイトだった清掃局長だった清水武彦君が、全国で初めて、容器の生産者が処理費用を負担するというデポジット制度を施行しようと言うことになりました。ところが、商工会議所は「観光の妨害になる。みんなが容器の清掃の費用まで負担することはできない」と言って反対したんですが、しかしさすがに、公害に反対する住民の運動や清水武彦君の頑張りによって「空き缶条例」というのができたわけです。初めのデポジット制に比べたら緩かったんですが、それにしても日本で初めて「生産者が容器の処理費用を負担しなければならない」という原則がここで確立したんですね。

その意味で京都の公害行政は、この時期か

ら始まっているわけですね。

観光公害から守る、防ぐ、長尾さんに代表されるような市民運動というものがあって、観光公害を制御してきた伝統があるわけですね。これがいま仁和寺や各所で景観を破壊するような状況が起こっているわけですけれども、こういうものをやはり京都の伝統を守って制御して欲しいというのが、ひとつの私の意見です。

もう一つは、日本の場合、景観とかアメニティーというものの保全が、公害の防止よりも遅れました。しかし京都市は他の市に比べれば、景観の規制をしていると私は思っているんですが、それが最近、観光経済への依存から規制の緩和に進んでいますね。

これは由々しきことだと思っています。

それこそ京都のほこりを破壊するわけで、私は仁和寺の山門周辺の景観は維持して欲しいと思います。きぬかけの道の歩道や、仁和寺の裏山に八十八カ所を巡る道があるんですよ。これが、素敵な道でありまして、私はよく学生を連れたり、家族を連れて行きました。仁和寺の裏道の模型をつくって、八十八カ所を回った。京都市が一望のもとに見えるんですよね。実に美しいんです。仁和寺というのは、そういうお寺の雰囲気だけではなく、裏山も含めて、全体として京都の景観の代表的なところでありまして、ホテルを無造作に作ってしまってですね、それで悠久の景観というものを破壊すると言うことには、反対なのであります。

京都は、オーバーホテル状態
アピールを機に、思いとどまって欲しい

広原 盛明さん（元京都府立大学長/都市計画）

僕は、都市計画が専攻で、特に京都の観光政策をまちづくりの観点からずっとチェックしてきたんですね。

この数年間いろんなところに書いてきて、最近「観光立国政策と観光都市京都」という本を出したんですけれども、そこで言ったのは、京都の観光振興計画というのは、国とストレートに結びついているんですね。安倍政権、そして今の菅政権ですね。菅さんが官房長官時代から、日本で一番政府の方針に忠実だったのが京都だったと思います。その結び目になったのが、デービット・アトキンソンさんという今の菅政権の成長戦略会議の委員になられた方ですね。菅さんが、官房長官時代にアトキンソンさんの本を読んで、すごく感激されまして、それ以来彼はブレインになったんです。

いろんなデータを見ると、だいたい菅さんの言ってることは、アトキンソンさんの言ったことをそのまま言っているんですね。特にラグジュアリーホテルという、富裕層向けの高級ホテルですね。これが、アトキンソンさんが非常に力を入れておりまして、全国に80箇所を作らなければならないとずっと言ってた。それをまともに受けて政策化したのが、京都の観光振興計画です。ですから、2016年頃から高級ホテルの進出がざぁっと具体化してきた。今回の仁和寺のホテルもその一環ですね。

いま京都は、オーバーホテル状態で、この５年間に３万室から５万５千室ぐらいに、２万５千室、２倍近く増えたんですね。これは、東京・大阪と比べても、倍率から言うとダン

トツで京都が多いんです。

これも門川さんの政策で、いろんな形の誘致政策を打ち出して、結果としていま何が起こっているかと言うと、ホテルのゴースト化が進んでいる。このまま行くと、ものすごいたくさんの空き家ホテルが出てくるんじゃないかと思うんですよね。

ですから本来であるなら、今までの呼び込み政策を反省してストップをかけなきゃならない。そして非常に品格を保った、適当なレベルで来ていただく。それが京都らしさにマッチして、環境容量も満たすという持続可能な観光政策をとらなければいけないんですけれども、今振興計画はほぼ仕上がっていますけれども、その委員の中にもアトキンソンさんがいて、最初の会議の議事録を読むと、彼は滔々と菅政権のラグジュアルホテル論をぶつんですね。

このラグジュアルホテルの問題は、南禅寺でも大変なことで、周りの方が死に物狂いで頑張って、しかしなかなかうまくいかない。で、次は仁和寺だと。京都の一番優れたところを全部食い物にされていく。あとに何が残るんですかということで、ずっと以前から警告をしてきましたし、地元の方々にも応援をしてきたということで、今回こういう形で、東京からのご支援もいただいて、アピールできるというのは大変良いことだし、これを機になんとか思いとどまって欲しいと思っております。

反対するのは当たり前
アイデアを出した人の感覚を疑う

土橋　亨さん（映画監督）

この話が来たときに、最初に感じたのは、私は東映京都撮影所というところで育っておりまして、あそこは、よく時代劇のロケーションに貸していただくところなんです。

中門の奥に金堂というのがあって、888年の創建のころから何度もなおされたりしますが、御所の創りと同じで建物は寺というけれども、御所のいわゆる屋敷なんですね。御室御所といって、天皇が引退して院政をひいたときお住まいになられた。建物は完全な御所づくりで、いわゆる蔀戸（しとみど）といいまして、下から桟で持ち上げて、そこへ止めてなかに開く。時代劇のロケーションでも御所づくりの寝殿づくりは、御室仁和寺だけなんですね。

そこから中門にかけてロケーション、そして中門から外側に向けて、王門の方を向けるロケ地で、しかも坂道で御室の嵐電の駅から仁和寺までずうっと坂があがっているんです。大内山という山へかけてあがっていきます。ですから山門に向けて中門からカメラを引くと何も町家が見えない。そこに山門だけがどーんとあり、長い境内と参道が見える。ですから時代劇のロケ地としても完璧なわけです。

そこへホテルみたいなものが目の前に

建つと、完全に壁ですね。逆に双ヶ岡の方から引くと山門が立派にパーンと見えるんです。スロープになっておりますから、山門は中ぐらいの高さであります。そこへ大きい遮蔽物ができたら、時代劇のロケーションはもうできないでしょう。そこは、昔から有名な双ヶ岡が王門からスパーンと見える。そして、またその途中には我々の先輩の伊藤大輔監督の住んでらしたところがあるんですが、そのお宅が、野々村仁清の窯跡なんです。

いわゆる御室の仁和寺に端を発した仁清焼き、御室仁和寺の窯というので、文化的にも歴史的にも景観的にも素晴らしい、３つの要素を備えたところへ、しゃれにもならないようなホテルが建つと。どんな風に和風にしようが、やっぱり大きな容量ですから壁になると思います。これはもう反対するのは当たり前で、それを考えてアイデアを出した人の感覚を疑うぐらい驚きです。

あの場所は、岩盤が非常に固いところで、

仁和寺の中門から金堂にかけてのところは大きな岩盤があるので、桜を植えているんですが、その桜は根が大きく張らないから、土を盛ったなかで桜の見物をする。それは八重桜で、いわゆる御室の桜として有名なんですが、大きく育たない。ですから、非常に良い高さで見れる有名な御室の桜がある。手前のところの仁和寺の真ん前の場所も相当固い岩盤でしょうから、どういう風に建てるのか、非常に疑問です。

そういうことも含めて、これは絶対やめていただきたいと、映画人としても思います。

世界遺産の前に 特例で宿泊施設を建てて良いかが問われる

桐田 勝子（世界文化遺産仁和寺の環境を考える会共同代表／事務局）

この話は、非常に狭い範囲で、つまり「上質宿泊施設誘致制度」に基づく、合意形成対象地域で進められていったんですけれども、その狭い範囲のなかでも、70～80％の方が、この計画に対して疑問に思っておられます。

私たちは昨年２回にわたって地域のお宅を訪問して、意見を伺ってきました。大きな宿泊施設なので住環境の悪化に対する懸念や、景観の改変については、みなさん疑問を持っておられます。

私自身は説明会の対象範囲外なんですけれども、40年近く御室界隈に住んでおりまして、シングルで育ててまいりましたので、子どももその地域で保育所に通い、学校や学童に通い、非常にお世話になった地域です。

仁和寺の門前や八十八カ所、双ヶ岡は、子育てをする上でも、保育所の子たちにとっても、非常に自然環境が豊かで、景観についても情操教育にとても良い環境です。そういう意味で、市内各地から子たちを連れて、保育士さんが来るところでもあります。福祉関連施設も多いですし、仁和寺の北には府立ろう学校もあります。安心して預けられる、過ごせる場所であったんです。それが、宿泊施設

誘致で果たしてどうなんだろうという心配は、私自身もそうですが、地域の方からも沢山お聞きしています。

景観の良さというのは、情操教育の場でもあり、生まれてから死ぬまで、高いお金を払わなくても生活の中で当たり前に「きれいだな」と感じられるもので、実際いまそういう形で、誰もが享受できる場所になっています。そこが魅力で、京都に観光客が来る。住環境や景観が一変するということは非常に大きな問題だと思います。近くでそういうことが起きているのは憂うることです。

狭い範囲の100軒、200軒がどうだということではなく、そのうちの数人が賛成とかいうことではなく、やっぱり広く、世界遺産の前に特例での大きな宿泊施設を建てて良いかは、問われなきゃいけないことで、こんな形でアピールしていただいたことを、大変有難く思っています。

◎記者質問

今後の展開は？

今後、草の根で拡げて行かれるのか、それとも著名人の方の第２弾、第３弾とかどんな形で今後の展開を考えていらっしゃるのか。

★ アピールを全国に拡げたい　　中島　晃

せっかくこれほどの方々に呼びかけをいただきましたので、これを京都及び全国に拡げていこうという風に思っています。具体的な取り組みについては、呼びかけ人の方々とご相談しながら進めていくつもりですが、京都は、いまホテルの問題が非常に深刻で、危機的な状況にあるので、このアピールを拡げると同時に、市民にこの問題を広く訴えるためのシンポジウムや集会なども企画していきたいと思っています。

◎記者質問

住民側は計画容認だったのでは？　　今の動きは？

理解が誤っていたら申し訳ないんですけれども、本来2015年ごろに計画があって、仁和寺さんと周辺住民の方が反対されて撤退され、その後事業者と住民側で協議して、この形なら良いよということで、計画容認にこぎ着けたという理解が一旦あったんですが、今回の計画は、いまどういう動きにあるのでしょうか。

★ 地元は合意していない　　桐田 勝子

2015年は、仁和寺前にガソリンスタンドとコンビニ建設計画があって、その反対運動を周辺住民の方がされて、撤退という形になりましたね。

その後、2016年10月末に「宿泊施設拡充・誘致方針」を策定して「宿泊施設を増やそう」という京都市の方針がありました。その直後の12月に、ホテル建設事業者の共立メンテナンスが土地の債権をとっていますので、計画自体はその時期、すでにあったと思います。同じ年の７月にコンビニ・ガソリンスタンド建設の撤退に持ち込んだ周辺住民で「仁和寺門前まちづくり協議会」が京都市の認定組織として作られていま

す。ホテル建設計画は、６～7名ほどの協議会理事さんたちとの話し合いが、京都市によれば20回以上行われてきたということです。

ご質問の「計画容認にこぎ着けた」という理解は、2019年６月４日インターネット上、５日に新聞紙上の報道ですね。同じ時期にTV放映もされていますが、その情報通りなら、2019年中に京都市の許可を受けて、着工が2020年1月、今年2021年8月に開業ということでした。でも、それはその時点での事業者側の希望であって、現在もまだ京都市の建築許可は出ていません。

上質宿泊施設誘致制度は、住民との合意形成が要件のひとつになっています。説明会を開いても、反対、疑念がある、オーバーツーリズムの問題で、もう一回考え直してという意見が多く出たと聞いています。私は対象外として参加できませんでしたので、参加された方からはそう聞いています。

★　延べ床面積の割り増しは、法律的に厳しい要件が…市民も疑問！

中島　晃

補足します。要するに、「合意対象地域」というのは、敷地から100m以内に住んでいる方で、2019年に合意ができたと言われているのは、地域で作られているまちづくり協議会の理事会で承認を受けたという風に言われています。

ただその後、説明会に基づく合意対象地域に説明して意見を聴く段階では、様々な意見が出てきて、まだ正式に地元の合意がとれている状況ではありません。

ですから、周辺の住民はこの計画については疑念があります。

特に一番重要な問題点は、上質宿泊施設誘致制度にのれば、本来の延べ床面積が3000㎡以下になっているのが約２倍5800㎡に割り増しをするという、そこの制度をクリアするには、正式に地元合意があったということが前提になります。

京都市議会でも議論があったようですが、正式に京都市に地元合意があったという報告があがっている状況ではありません。ただ、事業者の方が「合意があった」という風に言うのかもしれませんけどね。いまはまだ書類があがっている状況ではありません。上質宿泊施設誘致制度の前提になる地元合意があるかどうかが第一の関門。

（※翌26日に事業者から「合意形成状況報告書」が提出され、京都市産業観光局観光MICE推進室が受理。31日に有識者会議開催。４月19日に「上質宿泊施設誘致制度」にもとづく上質宿泊施設候補として事業者を選定）

もう一つの関門は、延べ床面積の割り増しについては、建築基準法上の、最終的には市長の許可が必要です。市長の許可は、もっと先になると思います。これは、建築審査会の同意が必要なので、法律的な要件としては、本来は非常に厳しい要件なのですが、その厳しい要件が全部とっくの昔にクリアしたように事業者が発表して、明日にでもホテルができるようなことをずっと報道がされて、地元の人たちもそう思い込んでしまっているところに、この問題の非常に大きなボタンの掛け違いがある。

地元の人たちは決して「うん」とは言ってはいません。疑問に思っています。

とりわけ今回のようにホテル問題がこれほど「ホテルラッシュ」と言われるような状況のなかで、計画が進行することについては、市民のみなさんも含めて、大きな疑問を持っているという風に考えます。

★世界遺産は世界共通の宝
100m以内の合意で決めるなど問題外

広原　盛明さん

これは京都市の行政手法の非常に大きな特徴なんです。

京都市は、自治会・町内会を非常に重視しているんですね。各小学校区、あるいはもっと小さな元小学校区単位に伝統的な町内会があります。そして自治連合会を作ります。そこの役員たちとそれぞれの区役所が非常に結びつきが強くて、例えば、市の広報も、他の政令指定都市では、郵便とかチラシとかの形がありますが、京都市は全部自治会経由でやるぐらい組織がしっかりできているんですね。その上層部の合意をとると、地域住民の合意はとれたというふうに、ずっと今までやってきた。

だからここだけではなくて、小学校の跡地をラグジュアルホテルに変えていくと言う場合も、その地域の自治会・町内会、連合会の幹部を押さえたら地域の合意はとれたんだという風に言っている。そこは、非常に大きな問題で、そんな一部の役員の意向で決まるようなことではない。

100m以内とか200m以内とかは問題外で、世界遺産なんですからね。

世界遺産をそんな地域の100mの人たちの意思で、その運命に関わるようなことを決めて良いのか。そんなことを世界遺産は全然想定してないですよ。そんなことがまかり通ったら、世界遺産はどんどん破壊されていきますからね。世界遺産でなくなっちゃうわけですよ。現実にそんなところはいっぱいありますからね。

世界遺産というのは、世界の人たちの共通の宝ですから、そんな一部のひとたち、わずか数人の合意で何かができるということになったらこれは、ほんとにファッショ的なやり方だと思う。全京都市、全国民の合意をとらなくてはいけないぐらいの大きな問題です。だから、東京の加藤登紀子さんとか、大石芳野さんも呼びかけ人になられた。大石さんは東京に居てもずっと奈良・京都のことに関心を持って常にバックアップをする。それは、そういう価値を持っているからですよ。100mとか200mとか、僕はほんとにけしからんと思うんです。

（聞きとり・まとめ　桐田勝子）

企画　　2021．6．27

◆シンポジウム「京都の歴史遺産　過去・現在・未来　　京都には もう ホテルはいらない！」

YouTube 配信　　https://www.youtube.com/watch?v=7roJ9pvjt_s